

コンパニオンミーティング

5月9日（木）

1. 心筋生検研究会（Cardiac Biopsy Conference）

腫瘍循環器病学へのいざない

Introduction to Onco-Cardiology

時間：18:00～19:30

会場：第1会場（ホールC）

オーガナイザー：田中 秀央（京都府立医科大学 細胞分子機能病理学）

加藤 誠也（済生会福岡総合病院 病理診断科）

演者：1. 志賀 太郎（がん研究会有明病院 腫瘍循環器・循環器内科）

「実臨床における Onco-Cardiology」

2. 赤澤 宏（東京大学大学院医学研究科 循環器内科学）

「Onco-Cardiology の基礎研究と臨床応用」

3. 池田 善彦（国立循環器病研究センター 病理部）

「分子標的薬を含めた新しい抗がん剤による心臓病理について」

4. 畠山 金太（奈良医科大学 病理診断科）

「Onco-Cardiology と心臓病理」

内容：がん、心血管病の多くが死に至る疾病であった時代、その合併は稀であった。長寿社会を迎え、2人に1人が生涯に一度はがんを経験し、一方では心不全パンデミックとされる時代、がんと心血管病の合併は急増している。がん治療の進歩に伴い放射線関連心疾患、がん関連血栓症、アントラサイクリン心筋症に加え、新規の分子標的阻害薬、血管新生阻害薬、免疫チェックポイント阻害薬による心血管有害事象も報告されている。

喫緊の状況で腫瘍循環器学 Onco-Cardiology が提唱され、がん患者の心臓を護る活動が開始されている。本会合では我が国の Onco-Cardiology の基礎研究、実臨床のトップランナーの先生方より実情を、心臓病理専門家には心筋生検が鑑別に重要な薬剤性心筋症、日常診断業務において Onco-Cardiology が意識される心臓病理について講義して頂き、がん診療に深く関わっておられる病理医の皆様は新たな領域への理解と参画をお願いしたい。

2. 口腔癌の病理診断（Pathological diagnosis of Oral Cancer）

口腔癌取扱い規約改訂と病理診断

Pathological view points for revised 'General Rules for Clinical and Pathological Studies on Oral Cancer (2nd)'

時間：18:00～19:30

会場：第2会場（ホールB7（1））

オーガナイザー：長塚 仁（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）

小川 郁子（広島大学病院 口腔検査センター）

演者：1. 長塚 仁（岡山大学）

2. 橋本 和彦（東京歯科大学）

3. 丸山 智（新潟大学）

4. 矢田 直美（九州歯科大学）

内容：口腔顎顔面領域が有する重要な機能の温存に、口腔癌の的確な病理診断は欠かすことができないが、口腔癌の発生頻度は比較的low、希少癌とも言え、また、多様な口腔粘膜病変と前癌病変との鑑別診断や早期癌の診断は、時に困難である。

今回は、WHO 分類改訂(2017)と口腔癌取扱い規約改訂(2019年)を踏まえ、日本臨床口腔病理学会口腔癌診断基準検討委員会委員を中心とした演者による講演を基に、口腔癌の病理診断に関連する諸課題について検討し、口腔癌取扱い規約等の主な改訂点の確認とともに、特に、口腔上皮性異形成の病理診断、口腔潜在的悪性疾患の概念と病理診断、口腔癌の病理検査の進め方、口腔癌の細胞診などについて、留意すべき点や残された今後の課題等について、口腔病理専門医のみならず、一般病理医の理解も深める機会としたい。

3. 日本膵胆道病理研究会 (Pancreatobiliary Pathology Club Japan (PBPCJ))

胆道腫瘍を極める

Let's master biliary neoplasms!

時間：18:00～19:30

会場：第3会場 (ホール B7 (2))

オーガナイザー：福村 由紀 (順天堂大学 人体病理病態学講座)

内藤 嘉紀 (久留米大学 病理学講座)

- 演者：1. 相島 慎一 (佐賀大学 病因病態科学 診断病理学)
2. 西川 祐司 (旭川医科大学 病理学講座 腫瘍病理分野)
3. 佐藤 保則 (金沢大学医薬保健研究域医学系 人体病理学)
4. 鬼島 宏 (弘前大学大学院医学研究科 病理生命科学講座)

内容：胆道癌は膵癌に次いで予後の悪い腫瘍である事から、これまでの臨床病理学的な見識に加えて、分子生物学的特徴を意識した上で、診断・研究を行っていくことが求められる。

本コンパニオンミーティングでは、肝内胆管癌を large-duct type と small-duct type の2型に亜分類する臨床病理学的・分子生物学的意義についての解説を行い、分子標的治療薬の導入に向けての可能性についても論じてもらう。また、胎生期の胆管発生過程と腫瘍の関わり、印刷事業所関連胆管癌についても、それぞれの専門家にレクチャーをお願いしている。最後に、これまで多くの病理医を悩ましてきた胆管生検診断のコツ、ポイントについて、再生性変化と癌の鑑別点を中心にディスカッションを行う事で、今後さらなる胆道病理の進歩につながる会を企画した。

4. BHD ネット主催：臓器横断的病理診断から読み解く「がん関連症候群」

(BHD-Net : Pathological approach to cancer-associated syndromes)

胚細胞遺伝子バリエーションに起因する「がん関連症候群」に対し、病理医の対応力向上に役立つコンパニオンミーティング

Pathological approach to “cancer-associated syndrome” caused by genetic disorders

時間：18:00～19:30

会場：第4会場 (ホール B5 (1))

オーガナイザー：古屋 充子 (横浜市立大学医学部 分子病理学講座)

演者：1. 中島 健 (がん研究会有明病院 遺伝子診療部)

「ゲノム医療と家族性腫瘍」

2. 辻 隆裕 (市立札幌病院 病理診断科)

「SDH 遺伝子バリエーション関連腫瘍」

3. 都地 友紘 (岡山大学病院 病理診断科)
「BHD 症候群関連腎癌の腎生検」
4. 近藤 哲夫 (山梨大学医学部 人体病理学)
「家族性甲状腺がん」

内容：がんパネル診断が保険収載を見据えて全国的に施行され始めたなか、偶発的に発見される胚細胞遺伝子バリエーション情報に対応を迫られる機会が今後更に増加すると予想されます。特に希少がんやその関連症候群の中には、まだ病態が十分明らかになっていない疾患や、散発性との鑑別が難しい疾患があります。本コンパニオンミーティングでは、病理医を含めて医療関係者に十分認識されていない新規がん関連症候群を中心に、疾患概念、病理医として知っておきたいポイント、類似疾患や散発性疾患との鑑別などを議論します。「がん関連症候群」に遭遇した場合に留意すべきことを臨床遺伝学の中島健先生にご講演いただきます。また見過ごしやすい家族性腫瘍症例として、コハク酸脱水素酵素 (SDH) 病的バリエーション関連腫瘍を辻隆裕先生に、BHD 症候群関連腎腫瘍の生検診断を都地友紘先生に、RET や APC 病的バリエーション関連甲状腺がんについて近藤哲夫先生に、それぞれご発表いただきます。

5. 国際病理アカデミー 日本支部 (The Japanese Division of the International Academy of Pathology (JDIAP))

婦人科病理ふあんだめんたる

Fundamental Lecture of Gynecologic Pathology

時間：18:00 ～ 19:30

会場：第5会場 (ホール B5 (2))

オーガナイザー：松原 修 (平塚共済病院病理診断科/IAP 日本支部 東京事務局)
小田 義直 (九州大学形態機能病理/IAP 日本支部 次期会長)

演者：1. 清川 貴子 (東京慈恵会医科大学病理学講座/IAP 日本支部 教育委員長)

「子宮頸癌の病理診断：「取扱い規約第4版」で何が変わったのか」

2. 柳井 広之 (岡山大学病院病理診断科)

「子宮内膜異型増殖症/類内膜上皮内腫瘍 (EIN) の考え方と鑑別診断」

3. 吉野 正 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病理学/IAP 日本支部 会長)

「IAP 日本支部の紹介と世界での役割」

内容：若手病理医を対象に婦人科腫瘍病理診断ということで子宮腫瘍および卵巣腫瘍を取り上げ基本的なことを懇切丁寧に解説する。あわせて国際病理アカデミー日本支部の活動と国際的な立ち位置について紹介する。

6. 日本小児病理研究会 (Japanese Society for Pediatric Pathology)

小児期に発生する脈管異常症の臨床と病理

Vascular anomaly in infants and children

時間：18:00 ～ 19:30

会場：第6会場 (ホール D7)

オーガナイザー：松岡健太郎 (獨協医科大学埼玉医療センター 病理診断科)

演者：1. 藤野 明浩 (国立成育医療研究センター 臓器・運動器病態外科部 小児外科)

「小児期脈管異常症の臨床と病理 (臨床)」

2. 松井 崇浩 (大阪大学大学院医学系研究科 病態病理学講座)

「小児期脈管異常症の臨床と病理 (基礎)」

3. 木村 幸子（北海道立子ども総合医療・療育センター 病理診断科）

「症例報告 Williams 症候群の一例」

内容：小児期に発症する脈管異常(Vascular anomaly)の多くは原因不明で、疾患概念も長らく混乱していた。臨床科(小児外科、皮膚科、形成外科、放射線科、眼科、耳鼻咽喉科、産科)により使用することで、疾患名がまちまちであり、病理診断に難渋することもしばしばあった。1992年にthe International Society for the Study of Vascular Anomalies (ISSVA)が創設され、疾患名が再検討され、脈管異常症は“血管腫(Vascular tumors)”と“脈管奇形(Vascular malformations)”に分類された。本セッションでは乳児期から小児期に発症する頻度の高い脈管異常症について臨床的な問題点および病理診断について、専門家により解説していただく。さらに、症例を募集しその検討も行う。

7. 病理解剖と死亡時画像診断 (Ai) 研究会 (Autopsy and Autopsy imaging (Ai) Study Group)

時間：18:00～19:30

会場：第7会場（ホール D5）

オーガナイザー：法木 左近（福井大学医学部 腫瘍病理学）

丸山理留敬（島根大学医学部 病理学）

演者：1. 菊池 穂香（北海道大学医学研究院 死因究明教育研究センター（オートプシーイメージング部門））

2. 法木 左近（福井大学医学部 腫瘍病理学）

内容：医療事故調査制度における医療事故の院内調査の項目に病理解剖と死亡時画像診断(Ai)が含まれている。したがって、医療事故が疑われる院内死亡例については、CT装置を有する病院であれば、Aiを実施することはほぼ必須になる。つまり、解剖前にAiが撮影されることになり、病理医もAiに関係しなければならなくなった。さらに、医療事故調査における解剖以外でも、Ai撮影を行う施設は多くなったと推測される。実際に、Ai撮影を施行した後に解剖をしたことのある病理医は、両者を施行することでより正確な病態や死因の究明が可能となることを実感していると思われる。Aiと病理解剖との関係について、放射線科医側からの視点も含め、今後のAiと病理解剖とについて意見交換ができればと今年もコンパニオンミーティングを企画した。多くの病理医がAiに興味を持ってもらえれば幸いである。

8. 日本デジタルパソロジー研究会 (Japanese Society of Digital Pathology)

デジタルパソロジーとAI、そして新ガイドライン

Digital Pathology and AI, with introduction of new guideline

時間：18:00～19:30

会場：第8会場（地下2階 ホール E (1)）

オーガナイザー：森 一郎（国際医療福祉大学医学部 病理学）

福岡 順也（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病理学）

演者：1. 森 一郎（国際医療福祉大学医学部 病理学）

2. 張ヶ谷健一（誠馨会病理センター）

3. 福岡 順也（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病理学）

4. 吉澤 明彦（京都大学大学院医学研究科附属総合解剖センター）

5. 塚本 徹哉（藤田医科大学医学部 病理診断学）

6. 伊藤 伸昭（日本医師会 ORCA 管理機構株式会社 事業推進部）

内容：デジタルパソロジーは世界で急速に広がりつつあり、画像解析技術の進歩に伴い AI の導入も現実味を帯びつつある。一方、多くの病理医は、デジタル診断の入口となる WSI スキャナーの購入に苦勞しており、具体的な機器導入の方法など迷っているのが実情と思われる。現在、日本病理学会では、学会主導で「デジタルパソロジーガイドライン(仮称)」を作成しており、その発行に伴って今後国内でもデジタルパソロジー導入が進むであろう。更に病理学会関連にて、AI による病理診断をテーマとした AMED 研究班が3つ存在しており、今後臨床への AI 導入も不可避と言えよう。これらの背景を鑑み、本セッションでは、ガイドラインの紹介に加え、デジタル診断と AI 診断における現状と今後の展望についてレクチャーとパネルディスカッションを行い、学会員と問題点につき討論する。今後のデジタルパソロジーおよび AI の進むべき方向性を模索する上で重要となろう。

5月10日(金)

9. 皮膚病理診断研究会 (The Japanese Society of Diagnostic Dermatopathology)

皮膚病理 update

Dermatopathology update

時間：18:00～19:30

会場：第1会場(ホールC)

オーガナイザー：新井 栄一(埼玉医科大学国際医療センター 病理診断科)

泉 美貴(昭和大学医学部 医学教育学講座)

演者：1. 三浦 圭子(東京医科歯科大学医学部附属病院 病理部)

2. 筑後 孝章(近畿大学医学部 病理学講座)

3. 福本 隆也(福本皮フ病理診断科)

4. 後藤 啓介(カロリンスカ大学病院 病理科)

5. 平木 翼(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 腫瘍学講座 病理学分野)

内容：皮膚病理診断研究会では、一般の病理診断に携わる先生方を対象に、皮膚科領域検体の病理診断をする上で、実践に役立つ具体的な内容を提供すべく活動しております。日本病理学会総会の「コンパニオンミーティング」と、秋に開催する「診断講習会」を活動の主軸としています。本研究会のホームページもご覧ください。

(<https://plaza.umin.ac.jp/~diagnostic-derma/>)

今回は、腫瘍性・非腫瘍性疾患を含む広い領域で、比較的新しい、あるいはあまり知られていないものの日常診断で知っておいたほうが良い疾患を、症例提示形式で紹介します。2018年10月に WHO skin tumours の第4版が発刊されました。WHO 新分類については最終日のワークショップで詳しく扱いますが、これを機会に皮膚病理の知識をアップデートしませんか？ご来場、お待ちしております。

10. 日本唾液腺腫瘍病理研究会 (The Japanese Society of Salivary Gland Tumor Pathology)

唾液腺導管癌を極める

Salivary duct carcinoma—its overview, variants, molecular pathology and therapeutical frontline—

時間：18:00～19:30

会場：第2会場(ホールB7(1))

オーガナイザー：浦野 誠(藤田医科大学医学部 病理診断学講座)

演者：1. 大内 知之(恵佑会札幌病院 病理診断科)

2. 草深 公秀（静岡県立総合病院 病理学部/静岡県立がんセンター 病理診断科）
3. 平井 秀明（東京医科大学 人体病理学分野）
4. 多田雄一郎（国際医療福祉大学三田病院 頭頸部腫瘍センター）

内容：唾液腺導管癌は高異型度乳管癌と類似した組織像を呈し、予後不良な高悪性度腫瘍として古くから知られる。従来本腫瘍はまれと考えられていたが、最近ではその疾患概念の認知度が高まったことにより、実際に病理診断をする機会が増えていると思われる。病理組織学的には *de novo* 発生か、多形腺腫由来癌の癌腫成分としての発生かを見極めることや、組織亜型を認識することが組織発生や予後の面から重要である。また、免疫組織化学的に、本腫瘍は通常 androgen receptor を発現し、約 40% の症例で HER2 強陽性となるため、近年アンドロゲン受容体遮断薬やハーセプチンを用いた治療報告が相次いでなされているが、未だ広く臨床適応されるには至っていないのが現状である。本コンパニオンミーティングでは、最近注目されている唾液腺導管癌に焦点を当て、病理診断の基本的アプローチに始まり、組織亜型の理解、分子病理学的基盤、新規治療の現状や問題点と将来展望について新知見を交えながら 4 名の演者に解説していただく。本企画が唾液腺導管癌に関する知識のアップデートになれば幸いである。

11. 消化管病理医の会（Gastrointestinal Pathologists Club）

時間：18:00～19:30

会場：第3会場（ホール B7（2））

オーガナイザー：八尾 隆史（順天堂大学大学院医学研究科 人体病理病態学）
根本 哲生（昭和大学横浜市北部病院 臨床病理診断科）

1. 十二指腸非乳頭部腫瘍 最近の話題から

演者：1. 九嶋 亮治（滋賀医科大学医学部附属病院）
2. 八尾 隆史（順天堂大学大学院医学研究科）

内容：十二指腸の腫瘍は乳頭部と非乳頭部とでは成り立ちが異なると考えられるが、近年では特に Non-ampullary duodenal epithelial tumors：NADETs と呼ばれる非乳頭部腫瘍が話題となっている。NADETs の病理に関する報告も相次いでおり、その組織分類、腺腫と癌との関連、発生の機構などが明らかとなってきた。今回は遭遇する機会の増している NADETs の病理について最近の知見も含めて整理して解説したい。

2. IBD、monogenic IBD、non-IBD の病理診断

演者：田中 正則（弘前市立病院）

内容：スコア化生検診断基準の提唱など、長年 IBD の病理診断に精力的に取り組んできた演者が、「IBD の所見を具体的にやさしく復習」、「IBD と鑑別が問題になりがちな monogenic IBD、severe infectious colitis、drug-induced colitis の鑑別」という内容で講演する。IBD は日常の診断業務でも頻度の高い疾患であるが、基本を整理し、エキスパートの見方・考え方を知る機会としたい。

12. 日本泌尿器病理研究会（Japanese Society of Urological Pathology（JSUP））

希少組織型を含む腎癌新規組織型診断のために

Diagnostic clues of novel histologic types of renal cancer including rare tumors

時間：18:00～19:30

会場：第4会場（ホール B5（1））

オーガナイザー：長嶋 洋治（東京女子医科大学 病理診断科）
鷹橋 浩幸（東京慈恵会医科大学附属病院 病院病理部）

演者：1. 長嶋 洋治
鷹橋 浩幸

「はじめに」(質疑なし、5分)

2. 古屋 充子（横浜市立大学医学研究科 分子病理）

「転座型腎細胞癌」(質疑含めて25分)

3. 村瀬 陽太（愛知医科大学 病理診断科）

「透析関連腎細胞癌」(質疑含めて25分)

4. 大江 知里（関西医科大学附属病院 病理診断科）

「希少腎細胞癌」(質疑含めて25分)

5. 鳥山 茜（順天堂大学医学部附属浦安病院 病理診断科）

「腎髓質癌の1例」(質疑含めて10分)

内容：2016年出版のWHO腎癌組織分類には、多くの新規組織型が加わったが、本邦では前WHO分類準拠の腎癌取扱い規約分類が用いられている。このギャップは、本邦での知見を国際的発信する際に障害となる。本CMでは腎癌新規組織型の診断について3名の講師が講演を行う。①転座型腎細胞癌の診断(古屋充子)：多数例の細胞遺伝学的検討に基づく知見を提示する。②透析関連腎細胞癌(村瀬陽太)：欧米に比して本邦では透析患者が多い。透析関連腎癌、特に後天性嚢胞腎随伴腎癌、淡明細胞乳頭状腎癌について概説する。③希少腎癌(大江知里)：fumarate hydratase欠損腎癌や腎髓質癌など希少腎癌について留学の経験を交えて提示する。追加発言として、鎌状赤血球症患者に限って発生する腎髓質癌の本邦での経験を提示する(鳥山茜)。以上を通じ、参加者には腎癌新規、希少組織型の診断について理解を深めていただく。

13. 日本婦人科病理学会 (Japanese Society of Gynecologic Pathology)

子宮の間葉系腫瘍

Mesenchymal tumors of the uterus

時間：18:00～19:30

会場：第5会場（ホールB5(2)）

オーガナイザー：大石 善丈（九州大学 形態機能病理）
柳井 広之（岡山大学病院 病理診断科）

演者：1. 真田 咲子（久留米大学 病理学教室）

「子宮平滑筋腫瘍」(25分)

2. 大石 善丈（麻生飯塚病院 病理診断科）

「子宮内膜間質肉腫」(25分)

3. 前田 大地（大阪大学 先端ゲノム医療学）

「特殊な間葉系腫瘍（PEComa, UTROSCT, BCOR関連）」(25分)

内容：子宮に発生する間葉系腫瘍は平滑筋腫瘍と子宮内膜間質腫瘍、その他の稀な腫瘍に大別される。平滑筋腫と平滑筋肉腫は鑑別が難しい場合があり、形態学的にその判断ができないものは悪性度不明の平滑筋腫瘍と診断される。核異型、核分裂数、壊死の評価が診断に重要である。また類粘液型、類上皮型の亜型もあり、診断において配慮を要する。

子宮内膜間質腫瘍は子宮内膜間質結節、低異型度子宮内膜間質肉腫、高異型度子宮内膜間質肉腫に分類され、未分化子宮肉腫も関連腫瘍として認識されている。高異型度子宮内膜間質肉腫はその概念が否定されていた時期もあったが、核形態の均一性と高度の核異型という観点から再認識され、YWHAЕ-FAM22 融合遺伝子の存在が証明されるに及んでその概念が改めて認められた。最近、ZC3H7B-BCOR 融合遺伝子を有する子宮内膜間質肉腫、卵巣性索間質腫瘍に類似した子宮腫瘍(UTROSCT)、血管周囲性類上皮細胞腫瘍(PEComa)、炎症性筋線維芽細胞腫瘍(IMT)も注目されている。現時点での子宮間葉性腫瘍の概念を整理するミーティングとしたい。

14. 日本肺病理学会 (Japanese Pulmonary Pathology Society (JPPS))

肺癌における遺伝子パネル検査の実装

Implementation of Panel Gene Testing in Lung Cancer

時間：18:00 ~ 19:30

会場：第6会場 (ホール D7)

オーガナイザー：谷田部 恭 (愛知県がんセンター中央病院 遺伝子病理診断部)
武島 幸男 (広島大学大学院医歯薬保健学研究科 病理学研究室)

演者：1. Alain Borczuk (Cornell Univ, New York)

「Pathologists and Precision Medicine in the US」

2. 角南久仁子 (国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科)

「NCC Oncopanel の実際」

3. 酒井 康裕 (兵庫県立がんセンター 病理診断科)

「OncoPrint Target Dx test and BRAF testing」

4. 谷田部 恭 (愛知県がんセンター中央病院 遺伝子病理診断部)

「FoundationOne CDx」

内容：肺癌では次世代シーケンサーを用いたパネル遺伝子検査が実臨床にも入ってきている。

そこで、4名のディスカッサントにより、その遺伝子パネルごとにその現状と問題点について議論いただく。

15. 日本甲状腺病理学会 (The Japanese Thyroid Pathology Society)

WHO改訂を受けた甲状腺癌取扱規約の対応について

New WHO classification of the thyroid and Japanese general rules for the description of thyroid cancer

時間：18:00 ~ 19:30

会場：第7会場 (ホール D5)

オーガナイザー：廣川 満良 (隈病院 病理診断科)
菅間 博 (杏林大学医学部 病理学教室)

演者：1. 加藤 良平 (伊藤病院)

2. 近藤 哲夫 (山梨大学大学院総合研究部 人体病理学講座)

3. 越川 卓 (修文大学 看護学部 看護学科)

内容：甲状腺の分野では、一昨年 WHO 分類が改訂され、それに伴いベセスダシステムの第二版が出版された。主な変更点として、NIFTP や UMP などの境界病変が新たに設定されたこと、濾胞癌の分類が変更されたこと、低分化癌の診断基準にトリノ提案が採用されたこと、などがあげられる。また、UICC の TNM 分類・病期分類も 2017 年に変更された(第 8 版)。これらの変更に対応し、本邦の甲状腺癌取扱い規約も 2019 年末までには改訂される予定である。本コンパニオンミーティングでは、第 8 版甲状腺癌取扱い規約をどのように改定すべきかに焦点を当てて行う予定である。